

スマイル タウン

第334号

2025.9
発行

ひの社会教育センター は、市民のみなさまの
“やりたい”を実現し、「豊かな暮らし」を応援する
施設として、1969年に日野市と勤社会教育協会が
協定書に基づいて設立しました。
今月もセンターで生きがいがづくりをされる沢山の
市民の方々の活動をお伝えします。

おとな講座 元気になれる歌声サロン



楽しく声を出して
歌って元気に！



- 対談コーナー「わたしたちの社会教育」
- 社会教育コラム（社会教育協会より）
- 表紙の講師は…元気になれる歌声サロン 仲渡玲子先生
- ひの社会教育センターからのご案内・賛助会・寄付お礼等

『わたしたちの社会教育』⑤

職員同士の対談形式で『わたしたちの社会教育』を語ります。今年度は、職員研修の際に各職員が何に取り組み1年にするか年度目標を語った中から、手掛け、育てている事業の話をします。

職員として、様々な環境、状況の中、悩みや葛藤を抱えながら、その意義や価値、成果を期待し、目標に進むありのままをお伝えし、社会教育施設の存在意義についても考えていきます。また、社会教育協会理事の荒井文昭さん（前・東京都立大学人文社会学部人間社会学科教授）にも同席していただき、荒井さんの視点から講評をいただきます。

第5回の今号は子育て支援カフェモグモグ（日野市から受託運営）の職員・栗澤雅富美に、日野市立みなみだいら児童館（日野市から受託運営）の職員・林実梨が話を聞きます。

第5回テーマ

●『ぐも』の声を聴く』は。

林：栗澤さんが仕事をするうえで、「こどもの声を聴くこと」は、いつも大切にしていることですか？

栗澤：センターで企画しているスタディーツアーで、幸福度の高いといわれる国、デンマークを訪れたのですが、私がなぜ行ってみたいと思ったかの話にもつながります。

日本でも、こどもの声を聴いていないわけじゃないし、誰もがこどもの幸せを願っているのに、何が違うんだろう？どうして差が出るんだろう？という問いのヒントをもらおうと思いました。

行ってみてわかったことは、こどもたちが自分で選ぶことができて、選ぶことが幸せに近付くのではないかと、ということでした。差があるとすれば、日本では普段から「決める」ことに慣れていないのかなと感じます。

子育て中のお母さんと話す中で、今日の1日の予定をチャットGPTに聞いて決めるとい話を聞きます。

こどもの年齢や、起きた時間、ご飯を食べた量や、今日の天気を入力し、今日どうやって過ごしたらいい？と聞くと、例えば今日は雨が降っているから、午前中は屋内のプールに行きましよう、午後は体が疲れているので、ゆっくり過ごして、夕方また元気になるから、夕方からはまた体を動かす施設に行く、夜もぐっすり眠れますよ、みたいに、言われたとおりに行動しているらしいのです。決めてもらうことが安心で、自分で決めることに自信がないのかな、と感じます。

林：初めての子育てのときは、考える材料もない、みたいなところもありますよね。

栗澤：こどものことを一生懸命考えているからこそなんですよ。夜中に何度も起きてぐっすり眠れないんだったら、どうしたらぐっすり眠れるんだろうと工夫するし、ご飯もいっぱい食べてもらいたいし、そのために助けをもらっているんですよ。

遊びの場面でもこどもが自分で決めていないと感じることはあります。こどものときの「食べる」「寝る」以外の主体的なことは「遊び」しかないのに、周りの子との関わりの中で、たとえばおもちゃの取り合い一つとっても、自分が遊びたくて近寄ったおもちゃを他の子が遊んでいたら、大人がこどもを抱っこして場を離してしまう場面を見ます。これって、その子の「あれが良かった」「遊びたかった」という気持ちを無視していることになりそうですよね。

林：おもちゃの取り合い場面、トラブルになる前に制御しちゃう大人が多いですよ。

栗澤：それは増えたと感じます。コロナ禍も影響しているかもしれませんが、人との関わりを怖がるというか、トラブルにならないように予防しているような。自分の気持ちを言えたり、わかってもらう経験をする機会が減っていることにつながります。

＜こどもと関わる現場の職員 左から林、栗澤



声を聴くことって、その子のやりたいと思うことを後ろから見守ってあげることもひとつなのだと思います。そういうことができている子は選べるようになるし、失敗したって別になんとかなるさって思える子になるのかなと思います。

自分はこれがやりたかった、使いたかった、取られて嫌だった、そうした色々な気持ちを表現している、その気持ち自体が悪いことじゃないから、と。いやだった、悲しかった、泣きたかった気持ちに蓋をしないで、泣いた自分も認めてもらえる経験を積んで、そうだったんだねって見守ってあげる姿勢が大人に必要なのかな、と。

こどもは自分の気持ちは我慢して、順番やルールを守って、けんかしないように、という風に大人がそういう場面ばかりを作ってしまうと、こどもが自分の気持ちに気付く機会を奪ってしまっているのではないかと思います。

林：こどもが初めて他者との関わりが持てて、自分以外の子の気持ちにふれる機会なのに、取り合いやけんかになる前に、離されちゃうと、他の子との関わりが生まれません。こどもの頃から、その子をまるごと認めてあげて、こどもの気持ちを尊重できると、自信を持てるようになるのでしょうか。

栗澤：その子自身が気持ちや、自分の意見を言うことが当たり前になるんじゃないかなと思います。知らないままだと、大人がこういうことを願ってるだろうと察して発言する子ばかりになっちゃうんじゃないかな。こどもの頃から、出来ても出来なくても、自分は自分でいい

んだって気持ちがないと、自分で決めることにいつまでも自信が持てないままになっちゃうのかな。

林：一方で、こどもの声を聴きすぎて、こどもの自由奔放やわがままにつながっているように見えて、大人もこどもの意見を聴かなければいけないという考えばかりが先行していて、大人の立場が弱いように感じることもあります。

栗澤：私も「声を聴くってなんだろう？」と思うとき、例えばどんなに小さい子にも、写真撮ってもいい？と訊くようにしていて、少しずつ大きくなっていく中で、そういえば訊かれていたなっていう経験をその子が積むことで、誰かに訊かれなかった時があったら、なんでこの人は訊いてくれないの？と、「あれ？」と気付くきっかけになると思います。

だから、願いを聴いて、わがまま放題を聴いているわけではなく、いつも訊かれていれば大切にされていることを実感するのではないかなと思います。こどもの声を聴くって、大切にされていることを伝えるメッセージだと思っんですよね。

●社会的マルチリトメント：ぐもについての社会は？

栗澤：大人が良かれと思って整備してきていることは、大人が便利なもので社会を作ってきていて、こどもの声が入っていないのではないかな？こどもにとってはどうなんだろうという、価値観の見直しが必要なんじゃないかという考えがあります。大人の「良かれ」が不適切な関わりになるのではないかと、という考えです。

昨年、「社会的マルチリトメント」という言葉を知りました。まず、マルチリトメントとは「おとなのこどもへの不適切な関わり」を意味する言葉で、虐待の4つの分野（身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待）を含む概念で、具体的に起きている

このマルトリートメントが社会の中で当たり前になり、見過ごされてしまう状況に対して「社会的マルトリートメント」という言葉を用いて問題提起する団体があります。※

また、こどもの人権や健康を侵害するという視点で、こどもが育つ環境において社会全体が不適切な関わりにつながることを防ごうと全国でアクションが起こっています。

林…社会的マルトリートメントの予防というのが、そういう大人の考え方を考え直すつていうことなのでしょうか。

栗澤…大人の価値観、物差しを見直そう、と言っています。例えば日本のこどもの睡眠時間が世界一短いと言われていますが、こどもが遅い時間まで勉強していることが当たり前になっていくことが、こどもの育ちを考えたときにどうなんだろうという視点です。

林…難しいけど、単純になくせばいいという問題じゃない気がします。社会全体で考え直すという動きがこれから広がっていくのでしょうか。

栗澤…体罰禁止法が出来て、5年程（まだ、びつくりするほど新しい）が経ち、やっちゃいけないということが当たり前になってきました。このように何年も何十年もかけ、変化、浸透していくのかなと思います。

林…こども家庭庁ができて、世の中の動きも変わっていくのでしょうか。

栗澤…こども家庭庁の「はじめの100か月の育ちビジョン」がすごくいいなと思っています。保護者、養育者のウェルビーイングの向上や、『こどもは安心と挑戦の循環で育つ』などのビジョンが書いてあります。

その安心と挑戦の循環で育つことが大事だなと思っています、親はずっと近くにいると安

心だけど、そうすると、挑戦して行く機会がないし、挑戦の時は、親はついて行かないで、戻って来る場所になって、安心を作ったあげていたら、こどもはそれを繰り返してけるんだよということが、私は多くの保護者の方に知ってもらいたいと思っています。

林…小さいときからできれば、その子たちが大人になったときに、こどもの声を聴くことができるようになるということですね。

栗澤…デンマークの小学校では、多様なこどもが集まる共同体の中で、相手を尊重して話を進めることを体験する場が学校だ、という話を聞きました。こどもだけじゃなく、大人にとっても安心できる社会を、周りの人と作っていききたいなと思います。

林…目指していかないと実現しないですもんね！

栗澤…何かが出来る、出来ないという価値観ではなく、幸せだと感じるのが大事で、こどもも大人も若者も、みんな自分を好きになつてもらいたいんです！

※ここで紹介した団体、子どもたちの育つ環境の課題に気づき、改善に取り組む『一般社団法人ジェイス』の代表理事である武田信子さんは、来たる今年の11月、トークイベントにご登壇くださいます。

▽社会教育協会100周年記念イベント

・11月24日（月・祝）

未来の100年を考える

トークイベント

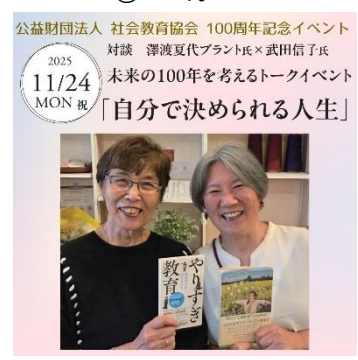
「自分で決められる人生」

（対談）澤渡夏代プラントさん

（デンマーク在住、執筆・講演家）

執筆・講演家）

×武田信子さん



【荒井さんからの講評】

おもちゃの取り合い場面で子どもたちのトラブルになりそうになると、大人が察知して制御してしまうことが多い。このやりとりが印象的でした。自分の気持ちをがまんして、ルールを守る場面ばかりをつくっていると、子どもが自分の気持ちに気づく機会を奪ってしまうとともに、自分に自信が持たにくくなってしまうことになる。自分以外の子の気持ちにふれる機会が減ってしまうという二人のやりとりには、わたしもその通りだなあと思いました。声を聴きすぎると子どもがわがままになってしまおうという不安が大人にあることに對して栗澤さんは、子どもの声を日常から聞くということは、わがまま放題を聞いているわけではない。気持ちや意見を聞くことが、「大切にされている」ことを子どもに伝えるメッセージになると、応答されていたことも印象的でした。

子どもの意見表明権とは、無視されることを拒否し、関係をまわりに求める権利なのだということを、わたし自身あらためて考えることができました。



▲（左より）職員の林、栗澤、荒井文昭さん

社会教育協会より

【社会教育「ラム」】

ひの社会教育センターを運営している社会教育協会は、今年、おかげさまで創立100周年を迎えました。センターを応援していただいている地域のみなさま、全国のみなさまに改めて感謝申し上げます。

同封チラシのとおり、100周年を記念する行事も11月に予定しております。協会100年のあゆみを振り返りつ、これからの社会教育の課題をともに考える機会にしたいと思っています。多くの方々のご参加をお待ちしております。

さて、100年前の1925年（大正14年）はどんな年だったのでしょうか。関東大震災から2年を経て、現在のNHKによるラジオ放送が始まるなど、本格的な復興に向けて社会が動き出していました（当協会もそうした情勢の中で設立されました）。日野市内でいえば、現在の京王線が八王子まで開業したのも、この年とされ、中央線に続く東京への第二の足として成長していくことになりました。

教科書にも載っている事柄では、納税額で制限されていた選挙権が普通選挙法により25歳以上の男子に拡大されました（女性の選挙権が認められたのは戦後です）。一方で、ほぼ同じ時期に治安維持法がつけられ、自由に対する制約が次第に大きくなり、やがて戦時体制に入っていくことになりました。

昨今「新しい戦前」などと言われるようになりました。協会も戦時中は様々な意味で苦難の歴史を歩んだと聞いています。次なる100年が「戦争がなくてよかった」という時代にできるよう、協会としても力を尽くして取り組んでいきたいと思っています。

星野一人（公財）社会教育協会事務局長）



表紙の講師は…【元気になれる歌声サロン】

月3回・木曜日 10:30～

講師 なかと れいこ 仲渡 玲子 先生

11年目を迎えたこちらのクラス。コロナ禍には会員さんが減少しましたが、再開後、徐々にまた人も集まり、現在20名を超え、広いツリーホールで歌声を響かせています。

インタビューで、合唱は人数が多いほうが良いのかと伺ったところ、合唱団ではないので、ここにいる皆さんは、もう少し気軽に声を出せる場として歌っている会員の方が多かな？と先生。

パート分けなどはなく、みんなで基本の主旋律メロディーを楽しく歌っています。

もっと上手に、とか、レベルアップを目指すというよりは、病後のリハビリや、久しぶりに声を出したい人など、様々な目的の人が参加しています。

〈教室の様子〉

ウォーミングアップでは、体操などで体をほぐし、おなかから声を出せるように、しっかり準備。

誤嚥予防にもなる舌の運動も行い、表情筋も動かして、声を出しやすく、そうしたことを意識するだけで違うと先生は話します。



↑とにかく身振り手振り、全身から伝わる仲渡先生のパワー！

曲によって、手拍子やステップを取り入れたり、体を動かすことも織り交ぜながら、季節を感じる歌や、フォークソングやクラシック調の曲、映画音楽なども、幅広いジャンルの歌を歌います。

ただ歌うだけでなく、リズムに合わせて体を動かしたり、体全体で表現することで、より音楽を楽しめるように、また専門的過ぎず、「音をあと紙一枚分、上げて～」や「息を頭の後ろに入れる」などのようにイメージしやすい言葉で、会員さんが意識できるような声掛けをしています。

〈先生に聞きました〉

「上手くなるとか、目標を高く設定するのではなく、『元気になれる』というのがちょうどいいかな、と思っています。お子さんが元気なのは当たり前ですが、大人、年配の人が元気になるのはいいことですよね。あとは、やらないよりやった方がいいよね、くらいの感じで続けられるといいなと思います！」

～会員さんへのメッセージ～
いつも楽しく来てくださってありがとうございます！

デイサービスの歌ではなく、衰えないための歌を！

とにかくここに来てもらったら、その時間を楽しく過ごしましょう、という気持ちでいつもお迎えしています！

ひの社会教育センターからのご案内



賛助会へのご協力ありがとうございます ★順不同・敬称略

①個人会員 1口 1,000円

金子 美千代 3口 金子 尚弘 10口 川松 ゆり 5口
笹本 竹司 5口 佐藤 ヒサ子 5口 志賀 勝子 3口
鈴木 あけの 10口 只木 貞吉 3口
戸枝 明美 1口 鳥居 由幸 5口 長井 節子 5口
名取 潮子 2口 橋本 弥生 5口 平塚 宗雄 5口
古谷 靖幸 2口 山田 佳子 3口 佐伯 安子 1口
谷掛 駿介 2口 中馬 瑛子 3口 名取 美佐子 1口
森野 文恵 3口 平野 紀子 5口 蜂屋 弘之・道恵 10口
小山 睨子 3口 進 緑 3口 長澤 成次 1口
美藤 愛 5口 高橋 博子 1口 入手 喬 5口
土方 尚功 5口 山本 英司 10口 七澤 温子 3口
辻本 正起 1口 里吉 ゆみ 1口 阿部 マリ子 3口
鈴木 静子 10口 木本 暁誠 2口 中村 信義 30口
小俣 純一・三千代 3口 榊原 和子 5口



②団体会員 1口 5,000円

いにしえ体操会 1口 劇団ひの 2口 島田組 2口
至誠第二保育園 1口 寿楽会 3口 アイキャン 1口
手話ダンスカワセミ 1口 多摩平の森自治会 2口
デザインU近藤一彦 1口 多摩整骨院 2口
野外教育事業所ワンパク大学 1口
割烹旅館いろは亭 1口 日野市民合唱団 1口
全国勤労者スキー協議会東京山スキー委員会 1口

【スマイルタウンへの感想やコメントを引き続き募集します】

賛助会員の皆さまへお届けしているスマイルタウンは、今号で334号目の発行となりました。

スマイルタウンは、近年はひの社会教育センターで講座を担う講師を紹介したり、職員同志で対話をとおして社会教育を考え、語ることで、皆さまへの事業報告のような役割を果たしてきました。

前号より今後の『広報誌スマイルタウン』に期待することや、企画へのご感想、皆さまのエピソードなどを募集しています！お寄せいただいた方の中から、抽選で限定1名様に豪華プレゼントを贈呈。企画は今年度全4回予定しています。前号では応募ゼロ。長野県飯綱町の採れたてトウモロコシはスタッフで美味しくいただきました（笑）

第2回目は、新潟県十日町市より新米をお届けします。

ご応募お待ちしております！



〈応募方法〉

氏名・住所・電話番号をお知らせください

- ① Google フォームより→
- ② メールにて→ info@hino-shakyo.com
- ③ ひの社会教育センター窓口で直接文書で。



但し、次号でのコメント掲載にご了承いただける方、及び国内にご住所のある方